

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

アルゼンチン韓国系移民文学作品選 詩「ソッテ（  
鳥竿）」「記憶するという事」「上弦の月に掛った  
木霊」「一年草の花」「歳月それは」「恋がしたい  
」

著者	？ 美姫，イム ドンガク，パク ヨンヒ，パク サン ス，金 煥基[訳]，川村 湊[訳]，守屋 貴嗣[訳]
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	13
ページ	295-300
発行年	2012-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7057">http://hdl.handle.net/10114/7057</a>

# アルゼンチン韓国系移民文学作品選

詩：曹<sup>チョ</sup>美<sup>ミ</sup>姫<sup>ヒ</sup>（三編）、イム・ドンガク、パク・ヨンヒ、パク・サンス  
短編小説：孟<sup>メン</sup>夏<sup>ハ</sup>麟<sup>リン</sup>  
翻訳：金<sup>キム</sup>煥<sup>ファン</sup>基<sup>ギ</sup> 補訳：川村湊・守屋貴嗣

## 詩

曹<sup>チョ</sup>美<sup>ミ</sup>姫<sup>ヒ</sup>：1991年アルゼンチンに移住。2006年「新春文芸」新人文文学賞受賞。在外同胞財団文学賞受賞。現在《在亜文人協会》会員。

### 「ソッテ（鳥竿）」

目が覚めた時  
花が咲いては散った春が私を育てたね  
雪解けを迎えた体には朗々とひびが入り  
乾いた血が巡る

踏み外した時間を咥えて巣を作る  
夢の中にも浮かぶ月を知り  
揺れて、消して、捨てる事すら  
嬉しくて涙が出る  
炎もなしに炎々と燃える私を  
救いたい

鳥は  
翼を地に埋め  
地は  
空に流れる  
時たま気力の尽きた空が愛をこぼすたびに  
積雲が浮かぶ

欲望の殻を破り、翼をはばたかせる  
許されただけの待つことが  
私を揺らす  
燃えるほど高くそびえ立つ愛を釘うちながら  
私は再び  
一羽の鳥になる

(訳注・ソッテは鳥の木像を頂上に載せた神竿)

### 「記憶するという事」

誰かを記憶するということは  
自分を愛しながら生きて行くといういい理由です  
道を歩きながら道を作り  
人の中で人になっていく

誰かを記憶するということは  
その堂々とした寂しさだけでも値がはる  
ずっと届かなくてもいい港です

日常の物騒な騒がしさを断絶して

立ち後れた悟りに胸を痛めながら  
魂の焔を掘り起こして帰ってくる夜明けです  
私の記憶を納めているあなたによって  
漂流する熱情を沈黙で押さえ  
現存の杯を満たしていくあなただけの充満です

誰かを記憶するということは  
互いに縄を丈夫に結ぶことです  
記憶は  
存在が育つ土壌です

### 「上弦の月に掛った木霊」

夜は指紋も残さず私の体の木霊を  
すべて受け入れていた

近づけばだんだんあざやかになる走行の試行錯誤  
不眠のペダルを踏みながら  
0時に向かう五体の闘志は  
初めから私の持ち分だった

理由を問うても木霊で返って来ない野生のものだから  
絶対静寂の水深はさらに深まるばかりで  
音沙汰のない空虚に脅えている  
消滅からはるかな距離  
あなたは私に愛を許しただけである

続々と迷い込む夜の迷路を抜け出し  
解き放しておいた揮発性の月の実体 または  
なめらかで歯応えのある生の密度に沈没する  
節制された沈黙の訳には  
あなたの深い考えがあるのかと  
記憶のほとりに月暈のかかった一つの生が通過する

酸化した一粒の涙は生の高度を支え  
上弦の月に刺された痛みが甘美である

私は月になりたい  
動き出す官能で蜜蝋の服を脱ぐ

イム・ドンガク：「自由文学」新人賞で登壇。LA「海外文学」編集委員。前在アルゼンチン文人協会長。

### 「一年草の花」

長い夜を明かし  
汲み上げた  
息吹

銀河の川辺に  
願いを  
濡らそうと

そっと

結び紐を解いて  
中身を  
さらけ出し

誰かが見るのではないかと  
恥じらいに  
燃える  
恋しさ

パク・ヨンヒ：1953年生、1987年移民。

### 「歳月それは」

私たち  
互いにあわれに思うこと  
互いの慰めと力になること  
肩が善良になり 目もとが穏やかになること  
ようやく横も後ろも振り向いて見れること  
手を繋ぐのも、手を差し伸べるのもいっそう容易になること  
歳月  
それは生の贈り物  
風に乗せて送る神の労りだ

パク・サンス：1995年詩集「紫光の夢」刊行、現在韓国人ポータルサイト  
KORNET 運営。

「恋がしたい」

雨の降る道を眺めて  
ふと彼が思い浮かぶとき  
目眩がする  
そういう恋がしたい

降り注ぐ雨に股下が濡れ  
北風に両頬がしびれても  
会いたいという一言だけで  
一気に駆け付けたくなる  
そういう恋がしたい

向かい合って顔を見つめて  
一粒の涙を落しながら  
なぜ今になって 私のもとにやって来たのだと  
意味なく恨む  
そういう人に出逢いたい

生きていく間  
数え切れないほど出会う人の中で  
私だけの香りを嗅ぎ分けられる人  
染み付き、疲れた生の中で  
私を考えるだけで  
生の重さを敷いて座れる  
そういう人に会いたい